

<b>Title</b>	自己受容の規定因に関する検討：愛着理論の観点から
<b>Author</b>	外尾, 安由子 / 池上, 知子
<b>Citation</b>	人文研究. 68 巻, p.43-63.
<b>Issue Date</b>	2017-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	津川廣行教授：中川眞教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 自己受容の規定因に関する検討： 愛着理論の観点から

外尾 安由子 池上 知子

本研究は、愛着理論の観点から自己受容の個人差を規定する要因を明らかにすることを目的とする。本研究では、理想自己と現実自己の乖離に直面している際の主観的自己受容感を、真の自己受容として定義し、幼少期に養育者との間に形成された愛着スタイルとその愛着に基づき形成される内的作業モデル（自己と他者についての一般的な表象）が、自己受容において決定的な役割を果たすかを検証した。幼少期に形成された安定的愛着が、現在の内的作業モデルの質を介して、青年期において理想自己と現実自己の乖離による脅威を緩和する効果を持つと予測した。予測に反し、安定的愛着低群が、対人関係における自己の否定的側面を受容する傾向が示され、幼少期の養育者との安定的愛着が、青年期における理想自己と現実自己の乖離に対する脆弱性を高めることが示唆された。一方、予測に一致して、拒否的愛着低群は自己の否定的側面を受容し得ることが示された。また予測した通り、ポジティブな他者観を持つ参加者はより高い自己受容度を示す傾向にあった。これらの結果から、拒否的愛着・ネガティブな他者観を持たないことが自己受容を促進することが示唆される。より重要な発見として、本結果は幼少期の安定的愛着が青年期の自己受容において不適応的な側面を持つ可能性を示している。

### 序論

#### 自己受容

自己受容は、心理療法家である C. R. Rogers によって、彼のカウンセリング理論であるクライエント中心療法における終結目標として打ち出された概念である（沢崎, 1984, 1993）。Rogers（1942, 末武・保坂・諸富訳, 2005）によれば、クライエント中心療法において、セラピーの場に訪れるクライエントは、はじめ自己の一部を否定した状態にあるとされる。彼らは自己が望ましくない感情や欲求を経験していることを否定し、そこから目を背けている。クライエントが抑圧しているのは、クライエントの親が否定してきたものであることが指摘されている（Rogers, 1942）。養育者によって持つてはならないとされた感情・欲求を経験している自己を受け入れられず、その経験自体を否定することで養育者に受容される自己を保とうとしているのである。セラピーの中でセラピストからこのような側面を含めた自己を受容される体験を経て、クライエントは自己の望ましくない側面にも目を向けることができるようになり、「これまで抑圧されていた感情から情動的に解放され、自分の置かれている状況の基本的な要

素に対する意識を高め、自分自身の感情を率直に、恐れなく認知する能力を増すのである。こうした過程を探求することにより、状況は明確になり、自分の種々の反応の相互関係を見出し始める。これが、自己洞察の始まりであり、起点である」(Rogers, 1942 末武・保坂・諸富訳, 2005, pp. 157) とされる。このようなカタルシスを経験することで、自己防衛から解放され、それにより新しい認知が自発的に発展することで自己洞察が可能になる。真の自己洞察は、それまでの、自己ではないものになろうとするような目標ではなく、より納得のいく積極的な目標の選択を伴い、あらゆる衝動にまつわる認知が可能になる。このようにして到達する段階が、自己受容である (Rogers, 1942)。

上述の成り立ちから、自己受容は自己の否定的・肯定的側面の両方を、防衛的反応や過大評価を伴わず、ありのままに理解し受け入れることと定義される (Rogers, 1951 保坂・諸富・末武訳, 2005)。この否定的側面の受容という点が、自己受容の特徴を示している。社会生活において、人は様々な困難を経験し、自己の否定的側面に直面する。それへの対処として否定的側面から目を背けることは、問題の解決を遠ざけ、適応的でない。否定的側面を認識しても肯定的自己観を損なわず、それに支えられて問題に対処することが適応にとって重要であり、自己受容とはこのような過程を可能にするものである。その点で単なる肯定的な自己評価とは異なる (溝上, 1999; 沢崎, 1984; 上田, 1996) ことに留意しなければならない。単なる肯定的な自己評価では、状況に応じて低下する可能性が高いのに対して、自己受容は望ましくない状況にも耐え、それに有効に対処することを支え得る点にその意義がある。

#### 自己受容研究の適応的意義

自己受容の適応上の重要性は多く指摘されている。これまで自己受容自体が成熟したパーソナリティや心理的健康の指標の一つとされ (Allport, 1961 今田訳, 1968; 板津, 1994; 鈴木, 2010)、対人関係との関わりについても、自己受容できていると他者に対しても受容的になり (Berger, 1952; Rogers, 1942; 上田, 2002)、良好な人間関係の重要な要因となり得るとされてきた (板津, 2006)。また、自己を受容している者は、日々の生活を主体的に生き、人生に意味や目的を見出していること (高井, 1999)、自己を受容することで自分から解放され、自己探求ではなく自己の外側に関心を向けられるようになることが指摘されている (Walter, 1976 狩栖訳, 1985)。ありのままの自己を受け入れるという言葉から、自己受容は向上心を低下させるのではないか、自己の欲求のみに従う邪悪な、無統制な、あるいは破壊的な「化け物」になってしまうのではないかという恐れを抱かせる (Rogers, 1961 諸富・末武・保坂, 2005; 沢崎, 2010)。しかし、Rogers (1961) は、自己の感情を否定するのではなく自己のものとして許すことで、その感情は全体の調和の中で適当な位置を占めるようになるのであり、人には自己実現、成長、社会からの承認の欲求もあるため、ありのままの自己を許しても、人間という集団の信頼に足る成員たり得ると主張する。そして、ありのままの自己を受容し、体験に開かれるようになると、逆説的に自己は (望ましい方向へと) 変容していくと説いている。

このように適応上非常に重要と考えられる自己受容の規定因を明らかにすることは大きな意義があるだろう。

### 自己受容の測定に関する問題

自己受容は上述のようにセラピーにおけるクライアントの変容の過程を表したものであることから、その測定は容易ではない。質問紙による測定は、Berger (1952) の研究以降、数多く行われてきたが (服部・吉田・小熊, 1992; 宮沢, 1987; 沢崎, 1993)、研究者によって自己受容の定義が異なり、そのため測定内容も一貫していないという課題がある (板津, 2006; 鈴木, 2010; 上田, 2002; 山田・岡本, 2006)。また、実証的研究では自己受容が自己評価と同義的に用いられていること (沢崎, 1984)、本来の意味での自己受容の測定が困難であることから、自己受容度は自己に対する肯定的な態度で置き換えられたことが指摘されている (板津, 1989)。

本研究では、理想と現実の乖離を自己の否定的側面の認識の指標として用いることで、過程としての自己受容を捉えることを試みた。Self-discrepancy 理論 (Higgins, 1987) によれば、自己評価の基準として理想自己が用いられることから、理想自己と乖離した現実自己の認知はネガティブな自己評価の指標とすることができる。理想と現実の乖離が小さいと認知しているとき、自己評価は肯定的であり、自己受容しているか否かに関わらず、従来の自己受容尺度で測定される主観的自己受容感は低下しない。一方、理想と現実の乖離を大きく認知しているとき、一般に自己評価は否定的になり、主観的自己受容感は低下する (Bills, Vance, & McLean, 1951) が、真に自己受容している者はこのような否定的側面の認識を乗り越えて主観的自己受容感を維持できる。このことから、理想との乖離が小さい場合の主観的自己受容感高群には単なる肯定的な自己評価をしている者と自己受容している者との混在しその判別は困難である。一方、理想との乖離を大きく認知している際的主観的自己受容感に着目すれば、単なる肯定的な自己評価と自己受容を判別して捉えられると考える。

これまでの研究においても、理想と現実の乖離は、その大きさよりもそれをどう受け入れるかを問題とするべきであると指摘されている。乖離と自己受容との間に存在する、より主観的な変数を解明することが重要であるという主張から、理想との乖離から自己受容尺度得点への負の影響の調整変数が検討されている (新井, 2001; 伊藤, 1992)。本研究においても、理想との乖離の影響を緩和する効果について検討するという方法を取り、新たな定義として、この緩和効果を持つことが自己受容を可能にする要因であることを示すものとする。

### 規定因

自己受容に影響を持つ要因はこれまでに様々に指摘されている。本研究では、自己受容の提唱者である Rogers (1951) の主張した、「両親から愛される」経験とそれに基づいて形成される自己に関する価値観について、上述の新たな定義による自己受容を用いて、実証的に検証することを目的とする。

Rogers (1951) の主張に沿う考え・知見を示す先行研究としては、乳児期に母親から学ぶ基本的信頼・不信頼 (Erikson, 1950 仁科訳, 1977/1980, Erikson, 1959 小此木訳, 1973)、自分にとって重要で意味のある対象に愛される経験 (板津, 2013)、子どもが母親の養育態度を愛情深く、干渉的・統制的でなく、承認を感じさせると認知していること (永田, 2012)、新生児期の母親からの授乳という人が人生で初めてする愛される経験 (Walter, 1976 狩栖訳, 1985)、好きな祖父母の存在、育った家庭の人間関係の暖かさ (關戸, 2011)、他者に受け入れられる経験とそれが生む安心感 (山田・岡本, 2006)、親やそれ以外の他者、自分自身から認められる経験 (浦川, 2014) などが挙げられる。いずれも自己受容を高める要因とされている。

養育者以外の対象からの受容の経験を取り上げたものもあるが、本研究では対象は養育者とし、さらに幼少期の経験に限定する。他者からありのままの自己を受容してもらうという経験は、当然幼少期や養育者からでなくても可能である。ただし、ありのままの自己を受容されたと感じるためには、ありのままの自己を表出する必要がある。そのため、幼少期以降に、あるいは養育者以外の対象からの受容を経験することは、実際には、一度ありのままの自己を否定される経験をした者には相当に困難であると考えられる。このことから、人生初期の被受容経験が非常に重要となるのであり、子どもが初めて深く関わる対象である養育者が大きな影響を持つことが予測される。

### 愛着理論

Rogers (1951) は、両親に愛された子どもは、両親の態度を自己のものとして取り入れることで自分自身を愛される価値のある存在として認知し、それが自己構造の形成に重要な影響を持ち、その後の自己受容を支えると想定した。この養育者の態度が子どもの自己に及ぼす影響過程については、愛着理論 (Bowlby, 1973, 1982) によって説明することができる。愛着理論によれば、子どもは養育者 (主に母親) との間に愛着を形成するが、その愛着表出のパターンである愛着スタイルは、養育者の養育態度によって異なるとされる。幼少期の愛着スタイルは基本的に3分類が想定されている (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。養育者が十分に受容性と応答性を示した場合、子どもは安定型の愛着スタイルを形成し、養育者への信頼と安心感に支えられて探索行動に取り組むことができる。養育者が受容性と応答性において一貫しない態度を示した場合には、子どもはアンビバレント型の愛着スタイルを形成し、養育者から与えられる愛情や受容に対し強い不安を持つために脅威のサインに敏感になり愛着欲求を過活性化する。養育者が受容性と応答性を示さず、拒否的な態度をとった場合、子どもは拒否型の愛着スタイルを形成し、養育者からの受容・応答が期待できないために、自身の愛着欲求を活性化しないという方略を採るようになる。そしてこの養育者との関係は子どもの発達に多大な影響を持つことから、乳幼児期に形成される養育者との愛着は非常に重要なものと考えられている (Bowlby, 1973)。また、愛着理論では愛着は子どもが安全性を確保するために

発達する生得的行動システムとされ、そのためストレスや脅威に直面した際に顕著に活性化されると考えられている (Bowlby, 1973)。このように、幼少期の被受容経験に基づき形成され、その後生涯に渡り個人のパーソナリティや能力に影響を持ち、特にストレス時に活性化するという性質から、愛着が自己受容にも大きな影響を与えている可能性が考えられるだろう。そして、愛着理論で示される、発達の初期に形成される愛着が、生涯に渡り影響を及ぼす過程は、上述の Rogers (1951) の主張に合致すると考えられる。加えて、Rogers (1951) の主張のうち、親から愛される経験を取り入れて形成される自己についての価値観は、愛着理論 (Bowlby, 1969, 1973, 1980) で提唱された「内的作業モデル」に相当すると考えられる。

### 内的作業モデル

内的作業モデル (Internal Working Model : 以下 IWM とする) とは、受容期待に基づく自己と他者の表象であり、幼少期に形成された愛着関係の質に基づき、養育者の受容性・応答性から他者モデルが、養育者の受容性・応答性の受け取り方から自己モデルが発達するとされる (Bowlby, 1969, 1973, 1980)。この IWM を用いて、外界の情報の処理や自他の行動のシミュレーションを行い、自身の行動を計画すると考えられている (Bowlby, 1980)。

IWM 形成に関しては、最も敏感な時期は幼少期であり、児童期、思春期には次第に敏感性を減少させながらも変化するが、それ以降は一生を通じて比較的变化することなく持続する傾向があると想定されている (Bowlby, 1973)。この IWM の変容可能性について、新しい愛着対象・重要な他者の影響を受けて変化する可能性を示唆する研究もあるが (戸田, 1991; 嶋田・田中, 2005)、IWM は愛着対象・他者一般やそれらとの関係についての比較的恒常的な期待であり、対人関係における認知や行動の枠組みとなるものである。そのため、IWM は、愛着に関わる情報の処理にも影響し (Collins & Read, 1994)、例えば、IWM がネガティブな者が表情からポジティブ感情を読み取りにくく、ネガティブ感情を読み取りやすい (金政, 2005) というように、関係内の経験の認知にバイアスを生じさせる (Simpson & Rholes, 2004)。したがって、ネガティブな IWM をすでに形成している者にとっては、新しい対象が例え受容的であっても、それをそのままに受け取ることは容易ではなく、IWM 自体を変化させ得るような安定的関係を築くことは難しいと考えられる。これが、人生初期の養育者との間に形成される愛着の影響が非常に大きくなる原因であると説明されている。

成人の愛着スタイルは、幼児の場合と異なり、実際の愛着行動を観察するのではなく、IWM を構成する他者モデルと自己モデルの二次元を質問紙法により測定する。成人の愛着スタイルと自己受容との関連については、対人関係に関する IWM が安定型の者は適度な自己肯定感、自己理解、洞察を示すという知見があり (稲垣・渡邊, 2007)、この研究の測定方法に具体性を持たせる改善を加えた研究でも、安定的な IWM の形成が内面的な自己特性の受容に正の影響を与えていることが示されている (武内・田井中・河野, 2014)。

以上より、本研究では、幼少期に養育者との間に形成された安定的愛着スタイルが、その後



のポジティブな IWM の形成を経て、青年期以降の自己受容を可能にすると考え。また、自己受容を捉えるため、理想と現実の乖離が主観的自己受容感に負の影響を与えることを前提とし、幼少期の安定的愛着スタイル及び青年期の IWM がこの負の影響を緩和する効果を持つならば、自己受容を可能にしていると考え。さらに、前者の緩和効果を後者の緩和効果が媒介すると予測し、以下の仮説を検討する。

仮説

1. 理想自己と現実自己の乖離は主観的自己受容感を低下させる
2. 理想自己と現実自己の乖離が主観的自己受容感に与える負の影響は、幼少期の安定的愛着スタイル傾向が高いと緩和される
3. 理想自己と現実自己の乖離が主観的自己受容感に与える負の影響は、幼少期の不安定的愛着スタイル（拒否及びアンビバレント）傾向が低いと緩和される
4. 上記の幼少期の愛着スタイルによる緩和過程は、現在（青年期）の IWM による緩和効果によって媒介されている

## 方法

### 調査参加者と手続き

大阪市立大学の学生 176 名（男性 101 名、女性 75 名）を対象に、大学の心理学に関する授業の終了後に質問紙を配布し、調査を実施した。質問紙への回答の所要時間は 15 分程度であった。調査参加の依頼にあたっては、養育者との関係と自己の捉え方について調べることを目的としていること、回答は参加者の自由意思によることなどを口頭で説明し、質問紙の表紙にも明記した。

### 質問紙の構成

1. **理想と現実の乖離** 理想自己と現実自己の乖離を捉えるために、調査対象である大学生の適応において重要性が高いと考えられる、学業領域、対人関係領域について、大学生生活充実尺度（奥田・川上・坂田・佐久田, 2010）、大学生のメンタルヘルス尺度（松原・宮崎・三宅, 2006）の項目内容を参考にして作成した項目を使用した。学業領域「授業内容の理解度」、「授業内容と興味との一致度」、「授業内容の満足度」などの 6 項目、対人関係領域「交友関係の広さ」、「友人の数」、「周囲とのなじみ具合・居心地の良さ」などの 6 項目。各項目について、理想の自己を 10 とする数直線を提示し、実際の自分の位置（現実自己）を評定してもらい、この現実自己得点を 10 から引くことで乖離得点を算出することとした。理想自己と現実自己の乖離の測定については、先行研究では Q 分類法（Stephenson, 1953）を用いて理想自己と現実自己の相関を見る（Rogers & Dymond, 1954）など、多様な方法が用いられている。本研究では、理想自己・現実自己の内容や理想の設定の高さに関わらず、理想との乖離を認識して

いるか否かを問題とするため、簡便に乖離のみを測定する方法を採った。

**2. 幼少期の愛着スタイル** 幼少期の愛着スタイルは本来ストレンジ・シチュエーション法 (Ainsworth et al., 1978) を用い養育者との分離・再会時の行動を測定することによって分類されるものであるが、本研究は大学生を対象とするため、回想により幼少期の母子関係を尋ねる酒井 (2001) の尺度を使用した。この尺度は Ainsworth et al. (1978) による幼少期の愛着スタイルの記述を参考に作成され、信頼性・妥当性が確認されている。多くの愛着研究同様、「母親」との関係を問うものだが、本研究では、多様な家族の在り方に対応するため、まず「主な養育者 (あなたの養育に最も大きく関わった人)」を思い浮かべるよう教示し、項目文中では「母親」を「その人」と置き換えて提示した。下位尺度は、安定的な愛着スタイル：「私はその人のそばでは安心感があった」、「その人と遊ぶのが楽しかった」などの6項目、拒否的な愛着スタイル：「私はその人の愛情がうすいと思ったことがあった」、「私が泣いていても、その人は関心がなかった」などの5項目、アンビバレントな愛着スタイル：「その人が出かける時には、むりやりついて行こうとした」、「その人がそばにいないと、夜眠れなかった」などの5項目、の3つである。(5件法：“1. 全く当てはまらない”～“5. 非常に当てはまる”)

**3. IWM** 成人の愛着スタイルの測定には、中尾・加藤 (2004) 邦訳の一般他者版愛着スタイル尺度 (ECR-GO; Brennan, Clark, & Shaver, 1998) を使用した。近年では成人愛着スタイルは見捨てられ不安と親密性回避の二次元から構成されると想定されており (Fraley, Garner, & Shaver, 2000)、これらはそれぞれ (ネガティブな) 自己観と他者観に対応するとされる (Bartholomew, 1990)。そこで、本研究では見捨てられ不安項目の得点を逆転させたものを自己観、親密性回避項目の得点を逆転させたものを他者観の指標として用いた。調査参加者の負担を軽減するため、中尾・加藤 (2004) での因子分析結果に基づき、下位尺度ごとに因子負荷量の上位半数に限定し、項目数を半減させて用いた。自己観：「私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する (逆転項目)」、「私は、(知り合いに) 見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない」などの9項目、他者観：「私は、人に何でも話す」、「私は人に頼ることに抵抗がない」などの6項目。(7件法：“1. 全く当てはまらない”～“7. 非常に当てはまる”)

**4. 主観的自己受容感** 宮沢 (1988) の自己受容尺度 SAI を使用した。この尺度は、宮沢 (1980) によって、信頼性・妥当性が確認されている。SAI は、自己理解 (自己の諸側面をあるがままに受け入れようとする事、自己に冷静な目を向け、自分のことがよく分かっていると自己認識していること)、自己承認 (現在の自己を嫌悪・否定せずにそのまま承認して受け入れること)、自己価値 (自己を無価値な存在として見たり、自己の存在について無意味感を持ったりすることがなく、人間としての自己の価値を疑わないこと)、自己信頼 (現在の自己及び将来の自己の可能性を信頼し、人生や物事に対する自己の対処能力に自信を持っていること) の下位尺度により、自己受容の4側面を捉えることを目的に作成されたものである。SAI



は全ての下位尺度の合計得点を用いる尺度であるが（宮沢, 1988; 新井, 2001）、本研究では同時に測定する理想自己と乖離した現実自己の認知が自己理解の側面に相当するため、自己理解の下位尺度を除く 19 項目を用いることとした。（4 件法：“1. 当てはまらない”～“4. 当てはまる”）

5. 個人属性 最後に、年齢・性別について回答を求めた。

## 結果

### 分析対象

回答に大幅な欠損のあった者を除き、170 名（男性 96 名、女性 74 名、平均年齢 18.66 歳、 $SD=.73$ ）を分析対象とした。

### 尺度構成

理想と現実の乖離 二領域の理想と現実の乖離を測定する計 12 項目について、想定に一致する因子パターンが見られるか確認するため、因子数を 2 に固定し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った（付表 1 参照）。その結果、想定通り学業領域 6 項目と対人関係領域 6 項目に分かれたため、得点が高いほど理想との乖離が大きいことを示すように、領域ごとに使用した項目の合計点を項目数で除した値を尺度得点とした（学業領域 6 項目： $\alpha=.83$ ,  $M=4.47$ ,  $SD=1.51$ 、対人関係領域 6 項目： $\alpha=.85$ ,  $M=3.46$ ,  $SD=1.71$ ）。

幼少期の愛着スタイル 安定的愛着スタイル 6 項目（ $\alpha=.79$ ,  $M=3.83$ ,  $SD=.67$ ）、拒否的愛着スタイル 5 項目（ $\alpha=.60$ ,  $M=2.07$ ,  $SD=.63$ ）、アンビバレント的愛着スタイル 5 項目（ $\alpha=.67$ ,  $M=2.74$ ,  $SD=.80$ ）について、それぞれの合計点を項目数で除した値を尺度得点とした。得点が高いほど、各愛着スタイルの傾向が高いことを示す。

IWM IWM を測定する自己観・他者観の計 15 項目について、項目数を元の尺度より減じて使用したことから因子構造の確認のため、因子数を 2 に固定し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った（付表 2 参照）。その結果、想定通り自己観 9 項目と他者観 6 項目で因子が構成された。自己観 9 項目（ $\alpha=.86$ ,  $M=4.16$ ,  $SD=1.06$ ）、他者観 6 項目（ $\alpha=.82$ ,  $M=3.64$ ,  $SD=1.16$ ）について、それぞれの合計点を項目数で除した値を尺度得点とした。得点が高いほど、各 IWM がポジティブであることを示す。

主観的自己受容感 SAI19 項目（ $\alpha=.88$ ,  $M=2.74$ ,  $SD=.44$ ）について、用いた項目の合計点を項目数で除した値を尺度得点とした。得点が高いほど、主観的自己受容感が高いことを示す。

### 尺度間の相関関係

尺度間の相関関係を Table 1 に示す。概ね理論に沿う相関関係が示されたが、幼少期のアンビバレント的愛着スタイルと自己観との間に予測された負の相関関係は示されなかった。

Table 1 相関分析

	2	3	4	5	6	7	8
1 理想との乖離(学業)	.30 ***	-.10	-.03	-.08	-.08	.03	-.31 ***
2 理想との乖離(対人関係)		-.17 *	.02	-.11	-.07	-.35 ***	-.34 ***
3 安定的愛着スタイル			-.40 ***	.53 ***	.04	.07	.15 †
4 拒否的愛着スタイル				-.05	-.26 **	-.14 †	-.33 ***
5 アンビバレント的愛着スタイル					-.07	.16 *	.02
6 自己観						.08	.41 ***
7 他者観							.27 **
8 SAI							

note. \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

### 仮説の検証

#### 幼少期の愛着スタイル

幼少期の愛着スタイルに関する仮説を検証するために、SAI を従属変数とし、理想と現実の乖離（学業領域）、理想と現実の乖離（対人関係領域）、幼少期の安定的愛着スタイル、幼少期の拒否的愛着スタイル、幼少期のアンビバレント的愛着スタイル（すべて連続変量、平均値により中心化）、及びこれらの交互作用項を説明変数とする階層的重回帰分析を行った（Table 2）。

Table 2 重回帰分析（理想との乖離×幼少期の愛着スタイル→SAI）

	SAI	
	$\beta$	
	step1	step2
理想との乖離(学業)	-.23 **	-.22 **
理想との乖離(対人)	-.26 **	-.30 ***
幼少期の安定的愛着スタイル	-.06	-.04
幼少期の拒否的愛着スタイル	-.33 ***	-.31 ***
幼少期のアンビバレント的愛着スタイル	.00	-.01
乖離(学業)×安定的愛着スタイル		.12
乖離(学業)×拒否的愛着スタイル		.05
乖離(学業)×アンビバレント的愛着スタイル		.02
乖離(対人)×安定的愛着スタイル		-.27 *
乖離(対人)×拒否的愛着スタイル		-.23 **
乖離(対人)×アンビバレント的愛着スタイル		-.04
調整済み $R^2$	.23 ***	.27 ***
$\Delta R^2$ (step1→step2)		.07 *

note. \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

理想と現実の乖離（学業領域）・理想と現実の乖離（対人関係領域）の主効果（学業： $\beta = -.22$ ,  $p < .01$ , 対人： $\beta = -.30$ ,  $p < .001$ ）はともに有意であった。どちらの領域でも、理想と現実の乖離が大きいほど SAI が低下するという、仮説 1 に一致する効果が示された。

また、学業領域においては、予測していた乖離と幼少期の愛着スタイルとの交互作用（乖離×安定： $\beta = .12, ns$ 、乖離×拒否： $\beta = .05, ns$ 、乖離×アンビバレント： $\beta = .02, ns$ ）はいずれも有意ではなく、仮説2及び3の幼少期の愛着スタイルによる緩和効果は確認されなかった。

一方、対人関係領域においては、予測していた乖離と幼少期の愛着スタイルの有意な交互作用が、乖離×安定（ $\beta = -.27, p < .05$ ）、乖離×拒否（ $\beta = -.23, p < .01$ ）の二つで見られた。乖離×アンビバレント（ $\beta = -.04, ns$ ）は有意ではなかった。そこで、有意であった乖離×安定、乖離×拒否について、それぞれ単純傾斜の検定を行った（Figure 1, Figure 2）。

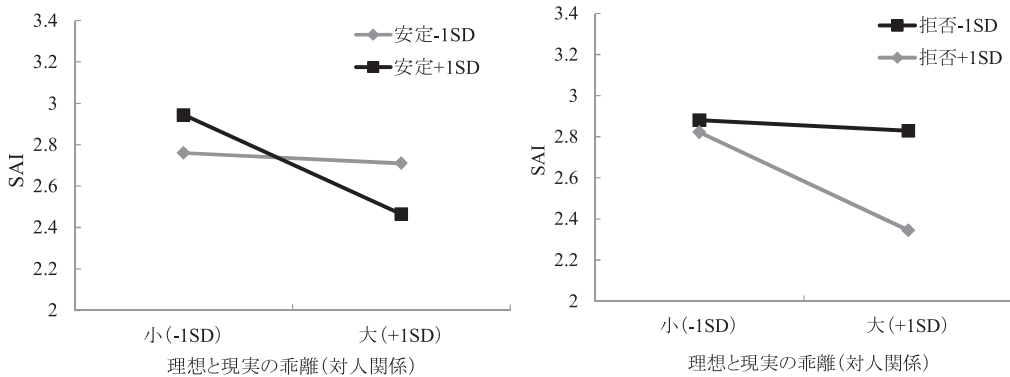


Figure 1. 安定高群・低群の SAI における乖離の効果 Figure 2. 拒否高群・低群の SAI における乖離の効果

#### 対人関係領域での乖離×幼少期の安定的愛着スタイル

単純傾斜の検定の結果、安定高群では対人関係領域での理想と現実の乖離が大きくなると SAI が有意に低下する（ $\beta = -.54, p < .001$ ）のに対し、安定低群では SAI が乖離の影響を受けない（ $\beta = -.06, ns$ ）という、予測とは逆の効果が示された。つまり、幼少期に養育者との間に安定的愛着を形成している者は、青年期の対人関係における望ましくない経験の影響を受けて主観的自己受容感を低下させている一方で、幼少期の安定的愛着傾向を低く認知している者は、青年期に対人関係で望ましくない経験を認識しても主観的自己受容感を維持できることが示唆された。これは、幼少期の安定的愛着スタイルによる緩和効果を予測した仮説2とは反対の結果であり、仮説2は支持されなかった。

#### 対人関係領域での乖離×幼少期の拒否的愛着スタイル

同様に単純傾斜の検定の結果から、拒否高群では対人関係領域での乖離が大きくなると SAI が有意に低下する（ $\beta = -.54, p < .001$ ）のに対し、拒否低群では SAI が乖離の影響を受けない（ $\beta = -.06, ns$ ）という、予測に一致する効果が示された。つまり、幼少期に養育者からの拒否を経験している者は、青年期の対人関係における望ましくない経験の影響を受けて主観的自己受容感を低下させており、一方、幼少期の拒否的愛着傾向を低く認知している者は、青年期に対人関係で望ましくない経験を認識しても主観的自己受容感を維持できることが示唆され

た。これは、幼少期の不安定的愛着スタイル（拒否及びアンビバレント）傾向の低さによる緩和効果を予測した仮説3に合致する結果であり、幼少期の拒否的愛着スタイルに関しては、仮説3が支持された。

加えて、仮説には直接関わらないものの、幼少期の拒否的愛着スタイルの主効果（ $\beta = -.31$ ,  $p < .001$ ）もまた有意であった。幼少期の拒否的愛着傾向が高いほど、SAIが低下するという関係が見られた。

## IWM

続いて、幼少期の愛着スタイルが持つ緩和効果は、青年期のIWMによってもたらされる緩和効果に媒介されているとする仮説4の前提となる、IWMの調整効果を検証した。SAIを従属変数とし、理想と現実の乖離（学業領域）、理想と現実の乖離（対人関係領域）、IWM自己観、他者観（すべて連続変量、平均値により中心化）、及びこれらの交互作用項を説明変数とする階層的重回帰分析を行った（Table 3）。

Table 3 重回帰分析（理想との乖離×IWM→SAI）

	SAI	
	$\beta$	
	step1	step2
理想との乖離(学業)	-.26 ***	-.23 **
理想との乖離(対人)	-.18 *	-.16 *
自己観	.36 ***	.39 ***
他者観	.16 *	.16 *
乖離(学業)×自己観		-.04
乖離(学業)×他者観		.14 *
乖離(対人)×自己観		-.01
乖離(対人)×他者観		.07
調整済み $R^2$	.31 ***	.33 ***
$\Delta R^2$ (step1→step2)		.04 †

note. \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

その結果、交互作用項を含むモデル2の決定係数（調整済み $R^2 = .33$ ,  $p < .001$ ）は有意であったが、モデル1からモデル2への変化量（ $\Delta R^2 = .04$ ,  $p < .10$ ）は有意傾向にとどまった。そのためモデル2の採用には留意する必要があるが、予測していた交互作用について確認した。学業領域においては、予測していた通り、乖離とIWMの有意な交互作用が、乖離×他者観（ $\beta = .14$ ,  $p < .05$ ）で見られた。ただし、乖離×自己観（ $\beta = -.04$ ,  $ns$ ）は有意ではなかった。有意であった乖離×他者観について、単純傾斜の検定を行った（Figure 3）。

### 学業領域での乖離×IWM 他者観

単純傾斜の検定の結果、他者観低群では学業領域での乖離が大きくなるとSAIが有意に低下する（ $\beta = -.36$ ,  $p < .001$ ）のに対し、他者観高群ではSAIが乖離の影響を受けない（ $\beta =$

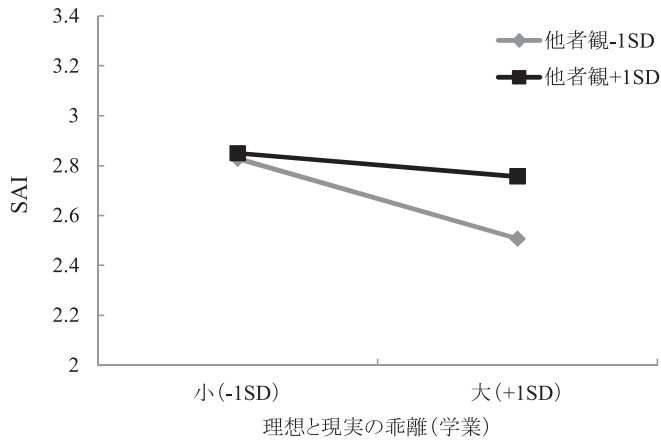


Figure 3. 他者観高群・低群のSAIにおける理想との乖離の効果

-.10, *ns*) という、予測に一致する効果が示された。つまり、現在ネガティブな他者観を持っている者は、学業に関する望ましくない経験の影響を受けて主観的自己受容感を低下させており、他方、ポジティブな他者観を持っている者は、学業に関して望ましくない経験を認識しても主観的自己受容感を維持できることが示唆された。これは、ポジティブな IWM による緩和効果を予測した仮説 4 に合致する結果であり、他者観に関しては、仮説 4 の前提となる緩和効果を確認できた。ただし、仮説 4 では IWM による緩和効果の媒介効果を予測しており、その前提となる幼少期の愛着スタイルによる緩和効果が本研究においては学業領域では示されていないため、媒介効果の検討には至らず、仮説 4 は支持されなかった。

#### 対人関係領域での乖離×IWM

一方、対人関係領域においては、予測していた乖離と IWM との交互作用 (乖離×自己観： $\beta = -.01$ , *ns*, 乖離×他者観： $\beta = .07$ , *ns*) はいずれも有意ではなかった。本研究において、幼少期の愛着スタイルによる緩和効果は対人関係領域での乖離の影響についてのみ見られており、予測していた媒介効果の検討には、これに対応する IWM の緩和効果が前提として必要であった。しかし、対人関係領域での乖離の影響については IWM による緩和効果は示されず、このため仮説 4 で予測していた媒介効果の検討には至らなかった。つまり、本研究で示された対人関係領域での乖離における幼少期の愛着スタイルによる緩和効果は、青年期の IWM によって媒介されてはいないことが示唆された。

最後に、仮説には直接関わらないものの、自己観及び他者観の主効果 ( $\beta = .39$ ,  $p < .001$ ,  $\beta = .16$ ,  $p < .05$ ) もまた有意であった。いずれも、IWM がポジティブであるほど、SAI が高いという関係が見られた。

## 考察

### 理想と現実の乖離

重回帰分析の結果から、先行研究（Bills et al., 1951; 新井, 2001）と同様、理想と現実の乖離は本研究においても従来の自己受容尺度得点で表される主観的自己受容感を低下させることが示され、仮説 1 は支持された。ネガティブな自己評価を意味する理想と現実の乖離に直面した際に低下する自己受容尺度得点は、やはりそのみでは肯定的な自己評価を測定しているものと考えられる。

ただし、この結果は因果の流れを明らかにするものではなく、自己受容から理想と現実の乖離への影響を含む可能性があることに留意しなければならない。自己受容度から理想と現実の乖離への影響については、自己を受容している者が高く持つと想定される向上心、成長志向が現実自己を高め、理想自己との差異を小さくすることが示されている（井上, 1999；木下, 2012）。

また、そもそも自己受容している者は様々な面において適応的であることから、ネガティブな状況に直面しにくいことも考えられる。特に、自己受容は対人関係に対するポジティブな影響を持つことが多くの知見で示されている。例えば、自己受容が良好な対人関係の構築に寄与すること、自己受容している者は、他者に対し信頼や愛情を高く持ち、他者との対立や他者への依存、対人場面での孤独を経験しにくいことが指摘されている（板津, 1994）。自己受容している者は、実際に対人関係がうまくいきやすく、また関係の評価もポジティブになりやすいため、この影響は考慮に入れる必要がある。SAI が測定しているのは自己受容そのものではなく、主観的自己受容感であると考えるが、自己受容している者は当然主観的自己受容感を高く持つため、自己受容が理想と現実の乖離に与える負の影響が SAI と理想と現実の乖離との負の関係に表れている可能性がある。

補足として、SAI 得点を説明変数、理想と現実の乖離得点を従属変数とした回帰分析を行ったところ、学業領域（ $\beta = -.31, p < .001$ ）、対人関係領域（ $\beta = -.34, p < .001$ ）でともに有意な主効果が得られ、SAI が高い者は理想と現実の乖離が小さいという関係が示された。

また、理想と現実の乖離の測定に関しては、今回用いた法則定立的方法への批判がある。自己評価や自尊感情への影響を見るためには、個人にとって重要な領域の乖離を測定すべきとする個性記述的アプローチ（Moretti & Higgins, 1990）が提唱されている。本研究では、一般的な大学生において重要度の高い領域での乖離を測定することを目的とし、大学生の適応にとって重要とされる内容（松原他, 2006; 奥田他, 2010）を設定した。法則定立的方法では、その理想の意識しやすさに関わらず理想と現実の乖離を測定することができるため（水間, 1998）、この方法で捉えた理想と現実の乖離にも一定の意味がある。一方で、個人に固有の理想を把握



することができないという限界があるため、今後の研究においては、並行して個性記述的観点も考慮し理想と現実の乖離を捉える必要があると考えられる。

### 幼少期の愛着スタイル

#### 安定的愛着スタイル

安定的愛着スタイルについて得られた結果は大変興味深いものである。愛着理論において、安定型は最も適応的な愛着スタイルとされ、多くの研究でそれを支持する結果が得られている。本研究では、幼少期に養育者との間に形成された安定的愛着スタイルの認知が、青年期の対人関係での困難に直面している場合には、主観的自己受容感を大きく低下させることが示された。安定的愛着スタイルを持つ者は良好な対人関係を築きやすいとされる (e.g. Hazan & Shaver, 1987) が、幼少期に安定的愛着スタイルを形成しているにもかかわらず、青年期の対人関係でつまづいていることは、本来青年期に生じる愛着対象の移行 (Markiewicz, Lawford, Doyle, & Haggart, 2006) に失敗していることを表し、そのような状況においては養育者との良好な関係の認知がかえって自身の養育者への依存を強調し、自己への信頼を含む自己評価を低下させたのではないか。この点については、今後更なる検討が必要であろう。

#### 拒否的愛着スタイル

拒否的愛着スタイルに関しては、予測に一致して、拒否的愛着傾向の低さによる緩和効果が見られた。つまり、幼少期の養育者からの拒否を経験していないと認知している者は、青年期に自己受容していることが示唆された。拒否的愛着スタイルは、養育者が受容性・応答性を示さなかった場合に形成されることから、不安定的愛着スタイルのうちでも、最も養育者からの受容を経験しておらず、自己を否定されてきたと考えられる。本研究の結果においては、幼少期の安定的愛着スタイルは自己受容を促進しなかったが、「自分は幼い頃養育者から否定されたことはない」という認知が、青年期の自己受容を促進したと言える。このことは、養育者からの受容経験が自己受容を可能にするという過程を間接的に支持すると考えられる。

#### アンビバレント的愛着スタイル

アンビバレント的愛着スタイルの影響が見られなかったことについては、本研究で用いた尺度のアンビバレント的愛着スタイルを測定する項目についての問題が考えられる。上述のように、幼少期の愛着スタイルは本来愛着行動によって測定されるが (Ainsworth et al., 1978)、本研究では方法論的限界から、自己報告式の回想による測定尺度を用いている。アンビバレント型は、その名称が示すように両価的な性質を持つことを特徴とすることから、質問項目による測定が難しかったのではないかと考える。特に愛着対象との近接性の探求は安定型と共通しており、それが過度に表れることがアンビバレント型の特徴と言えるが、回想によりその程度を自身で適切に判断することができていなかった可能性がある。例えば、アンビバレント的愛着スタイルの測定項目である「その人 (主な養育者) が出かける時には、むりやりついて行こうとした」などは、安定型に分類される者においても、ある程度は当てはまり、アンビバレン

ト型のみを捉えるには不十分であったと考えられる。アンビバレント型は、成人愛着スタイルでは見捨てられ不安（ネガティブな自己観）の高さに対応すると考えられており（金政, 2005）、今回使用した尺度についてもアンビバレント的愛着スタイルと青年期の愛着関係での自己信頼感との間に負の関係が示されている（酒井, 2001）。しかし、本研究においては両尺度間に有意な相関関係が見られなかった（ $r = -.07$ , *ns*）ことから、本研究におけるアンビバレント的愛着スタイルの測定に問題があったことが示唆される。幼少期の愛着スタイルの測定は後述のように大きな課題であり、可能であるならば幼少期に行動によって測定を行うことが望ましいだろう。

## 青年期の IWM

### 自己観

自己観について、理論的には、Rogers (1951) の主張にある自己についての価値観に最も近い概念であると考えられたが、自己観のポジティブな者が理想と現実の乖離に直面しても自己受容できるという予測は支持されなかった。ただし、SAI に対する自己観の主効果が示されており、主観的自己受容感には影響することが確認された。本研究では対人関係領域として主に友人関係を想定し項目を設定したが、親密性回避（ネガティブな他者観）が友人関係における適応性に強く影響するのに対し、関係不安（ネガティブな自己観）は心理的距離の近い母親・恋人との関係に影響する（金政, 2007, 2009）ことから、恋愛関係における理想との乖離には自己観が影響している可能性が考えられる。

### 他者観

他者観は学業領域での理想と現実の乖離の影響を緩和した。つまり、現在ポジティブな他者観を持っている者は学業領域でのつまづきを乗り越え主観的自己受容感を維持していることが示された。この関係を説明する要因として、サポートシーキングの個人差が考えられる。安定型はストレスに際しサポートを求めやすく、建設的な反応をする傾向にある（Feeney, Noller & Roberts, 2000）のに対し、回避型（ネガティブな他者観）を含む不安定的愛着スタイルを持つ者は適切なサポートを求めにくく（Mikulincer, Florian, & Weller, 1993; Simpson, Rholes, & Nelligan, 1992）、葛藤時に建設的でない反応をする傾向にある（Feeney et al., 2000）。理想と乖離した望ましくない自己に直面した場合にも、ポジティブな他者観を持つ者は他者への援助要請を行いやすく、効果的な対処をすることができ、主観的自己受容感の低下を避けることができるのではないだろうか。

### 回避と自己受容

本研究では、理想との乖離を測定した領域は異なるものの、幼少期の拒否的愛着スタイルと青年期の他者観とともに自己受容との関係が示された。この二つは親密性回避という共通の特性を持つ。回避と自己受容の関係について、親密な関係を回避する者は自己受容性が低い（廣實, 2003）こと、他者からの批判やそれにより傷つくことを回避しようとする閉鎖的・防衛的

傾向の高い者は、自己受容が困難である（高井，1999）ことが指摘されている。本研究の結果は、これらの先行研究に一致するものである。

### 自己受容の形成過程

本研究では、Rogers（1951）の示した自己受容の形成の過程を検討することを目的としたが、幼少期の愛着スタイル及びIWMは、一部予測に沿う効果を示したものの、IWMによる媒介効果は見られず、幼少期の被受容経験がポジティブなIWMを形成し、それが自己受容につながるという過程は示されなかった。後述のようにIWMの測定方法にも検討の余地があるが、幼少期の愛着スタイルが青年期の自己受容に影響を持つ過程に働く他の要因を明らかにすることを今後の課題としたい。

### 本研究の限界と今後の展望

本研究は、自己受容の新しい操作的定義を行い、養育者からの受容の指標として幼少期の愛着スタイルを用いて、これが青年期の自己受容に影響することを実証的に示した。しかし、本研究における幼少期の愛着スタイルは回想により測定されたものであり、この点に本研究の限界がある。多くの場合には対象となる養育者との関係は青年期の現在にも継続されていると考えられ、回想にはこの現在の養育者との関係が影響している可能性がある。例えば、幼少期には養育者と良好な関係であった者が、思春期・青年期において関係を悪化させ、認知を歪めて幼少期の関係をネガティブに評定するということが起こるかもしれない。また、不安定的愛着スタイルを持つ者が親を過度に理想化することが指摘されており（Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）、そのような防衛的反応により、正確な測定ができていない可能性にも留意しなければならない。さらに、縦断的調査でないことから、幼少期の愛着スタイル・IWMともに、自己受容からの影響を受けている可能性があり、因果関係の解釈には慎重にならなければならない。

また、IWMは、自動的に情報の処理に機能しており（坂上，2005）、多くの場合意識外で働くことされ（遠藤，1992）、本研究で用いた自己報告という顕在的指標ではこの無意識的な過程に接近できないという指摘がある（北川，2006）。最近の研究ではIATやGNATなどの潜在指標による測定が試みられており（Dewitte, DeHouwer, & Buysse, 2008; 藤井・上淵・山田・斎藤・伊藤・利根川・上淵，2015; Yamada, Fujii, & Uebuchi, 2011）、今後は潜在指標を用いた検討も行いたい。

[付表]

付表 1. 理想と現実の乖離尺度の因子分析

	I	II
友人の数(対人)	<b>.90</b>	.02
友人関係(対人)	<b>.87</b>	-.06
交友関係の広さ(対人)	<b>.82</b>	-.02
学部・ゼミ等での周囲とのなじみ具合・居心地の良さ(対人)	<b>.58</b>	.16
先輩との関係(対人)	<b>.53</b>	-.02
サークル等での周囲とのなじみ具合・居心地の良さ(対人)	<b>.50</b>	-.03
大学で学んでいる内容と自分の興味との一致度(学業)	.01	<b>.81</b>
現在学んでいる授業の内容と自分との適合度(学業)	-.06	<b>.75</b>
大学で学んでいる内容の将来への有用度(学業)	-.10	<b>.68</b>
大学のカリキュラムと自分の期待との一致度(学業)	.04	<b>.66</b>
授業内容の満足度(学業)	.06	<b>.62</b>
授業内容の理解度(学業)	.08	<b>.45</b>

付表 2. IWM 尺度の因子分析

	I	II
私は、見捨てられるのではないかと心配だ(自己観:逆転)	<b>.78</b>	-.01
私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する(自己観:逆転)	<b>.73</b>	.05
私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない(自己観)	<b>-.71</b>	-.01
私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう(自己観:逆転)	<b>.67</b>	.17
私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している(自己観:逆転)	<b>.65</b>	-.12
私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する(自己観:逆転)	<b>.63</b>	-.06
私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している(自己観:逆転)	<b>.60</b>	-.08
私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう(自己観:逆転)	<b>.58</b>	-.05
私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする(自己観:逆転)	<b>.38</b>	.16
私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない(他者観)	.01	<b>.81</b>
私は人に頼ることに抵抗がない(他者観)	-.02	<b>.80</b>
私は、人に何でも話す(他者観)	.05	<b>.67</b>
私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う(他者観)	.08	<b>.62</b>
私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない(他者観)	.04	<b>.57</b>
私は人に心を開くのに抵抗を感じる(他者観:逆転)	.20	<b>-.46</b>

## [引用文献]

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Allport, G. W. (1961). *Pattern and growth in personality*. Holt, Rinehart and Winston. (今田恵 (監訳) (1968). 人格心理学 (上・下) 誠信書房)
- 新井幸子 (2001). 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響 心理学研究, 72, 315-321.
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Berger, E. M. (1952). The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of

- others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 778-782.
- Bills, R. E., Vance, E. L., & McLeans, D. S. (1951). An index of adjustment and values. *Journal of Counseling Psychology*, 8, 140-146.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss. Vol. 3. Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1982). *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment. 2nd ed.* New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford.
- Collins, N. L., & Read, S. J. (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In K. Bartholomew & D. Penman (Eds.), *Advances in personal relationships*. Vol. 35. London: Jessica Kingsley. pp. 53-90.
- Dewitte, M., De Houwer, J., & Buysse, A. (2008). On the role of the implicit self-concept in adult attachment. *European Journal of Psychological Assessment*, 24, 282-289.
- 遠藤利彦 (1992). 愛着と表象 —— 愛着研究の最近の動向 —— 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観 心理学評論, 35, 201-233.
- Erikson, E. (1950). *Childhood and society*. Norton. (仁科弥生 (訳) (1977/1980). 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E. (1959). *Identity and the life cycle*. International University Press. (小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 —— アイデンティティとライフサイクル —— 誠信書房)
- Feeney, J. A., Noller, P., & Roberts, N. (2000). Attachment and close relationships. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close relationships*. (pp. 185-201). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Fraley, R. C., Garner, J. P., & Shaver, P. R. (2000). Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 816-826.
- 藤井勉・上淵寿・山田琴乃・斎藤将大・伊藤恵里子・利根川明子・上淵真理江, (2015). 潜在的な愛着の内的作業モデルと情報処理の関連 —— GNAT を用いて —— 心理学研究, 86, 132-141.
- 服部智・吉田昭久・小熊均 (1992). 「自己受容」の基底因IV—Berger's scale の再検討 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 40, 289-308.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 廣實優子 (2003). 現代青年の交友関係から見た自己受容性と社会的スキル 広島大学大学院教育学研究科紀要, 52, 305-310.
- 稲垣千代・渡邊孝憲 (2007). 母親の養育態度と内的作業モデルとの関連について 家庭教育研究所紀要, 29, 16-28.
- 井上光一 (1999). 自己受容における向上心とあきらめ 京都教育大学大学院教育学研究科紀要, 45, 406-418.
- 板津裕己 (1989). 自己受容尺度短縮版 (SASSV) 作成の試み 応用心理学研究, 14, 59-65.
- 板津裕己 (1994). 自己受容性研究の発展 (1) —— 評定法を中心とした自己受容性測定法の整理 —— 駒沢社会科学研究, 26, 1-30.
- 板津裕己 (2006). 自己受容性と共感性との関わりについて 高崎健康福祉大学紀要, 5, 33-45.
- 板津裕己 (2013). 自己受容性研究の発展 (2) —— 自己受容性の発達の研究の整理 —— 高崎健康福祉大

- 学紀要, 12, 195-206.
- 伊藤美奈子 (1992). 自己受容を規定する理想-現実自己の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 164-169.
- 金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響——成人愛着の観点から—— 心理学研究, 76, 359-367.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, 22, 274-284.
- 金政祐司 (2009). 青年期の母—子ども関係と恋愛関係の共通性の検討：青年期の2つの愛着関係における悲しき予言の自己成就 社会心理学研究, 25, 11-20.
- 木下千春 (2012). 青年期における自己受容と対人関係について 追手門学院大学心理学論集, 20, 25-33.
- 北川恵 (2006). アタッチメント測定手法としての投影法の意義・成果・課題 四天王寺国際仏教大学紀要, 41, 1-14.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- Markiewicz, D., Lawford, H., Doyle, A. B., & Haggart, N. (2006). Developmental Differences in Adolescents' and Young Adults' Use of Mothers, Fathers, Best Friends, and Romantic Partners to Fulfill Attachment Needs. *Journal of Youth and Adolescence*, 35, 121-134.
- 松原達哉・宮崎圭子・三宅拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因 立正大学心理学研究所紀要, 4, 1-12.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller A. (1993) Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 817-826.
- 宮沢秀次 (1980). 青年期における自己受容性. 測定スケールの検討 日本教育心理学会第22回大会発表論文集, 516-517.
- 宮沢秀次 (1987). 青年期の自己受容性の研究 青年心理学研究, 1, 2-16.
- 宮沢秀次 (1988). 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論——実証的心理学のパラダイム—— 金子書房
- 水間玲子 (1998). 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, 46, 131-141.
- Moretti, M. M., & Higgins, E. T. (1990). Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- 永田智弥 (2012). 大学生における自己意識傾向と自己受容度, 及び両親の養育態度との関連 日本教育心理学会第54回大会発表論文集, 598.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田裕子 (2010). 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9, 1-14.
- Rogers, C. R., & R. Dymond. (1954). *Psychotherapy and Personality Change*. University of Chicago Press.
- Rogers, C. R. (1942). *Counseling and Psychotherapy*. Houghton Mifflin. (末武康弘・保坂亨・諸富祥彦 (訳) (2005). カウンセリングと心理療法 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1951). *Client-Centered Therapy*. Houghton Mifflin. (保坂亨・諸富祥彦・末武康弘 (訳) (2005). クライアント中心療法 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. (1961). *On Becoming a Person: A Therapist's View of Psychotherapy*. Houghton Mifflin. (諸富祥彦・末武康弘・保坂亨 (訳) (2005). ロジャーズが語る自己実現の道 岩崎学術出版社)
- 坂上裕子 (2005). アタッチメントの発達を支える内的作業モデル 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッ



- チメント——生涯にわたる絆——(pp. 32-48) ミネルヴァ書房
- 酒井厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係——内的作業モデル尺度作成の試み—— 性格心理学研究, 9, 59-70.
- 沢崎達夫 (1984). 自己受容に関する文献的研究 (1)——その概念と測定法について—— 教育相談研究, 22, 59-67.
- 沢崎達夫 (1993). 自己受容に関する研究 (1)——新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討—— カウンセリング研究, 26, 29-37.
- 沢崎達夫 (2010). 自己受容 (グッドイナフ) は向上心を弱めるか 児童心理, 64, 282-288.
- 關戸圭子 (2011). 祖父母との対人関係が大学生の自己受容と対人態度に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, 11, 49-55.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.
- Simpson, J. A., & Rholes, W. S. (2004). Anxious attachment and depressive symptoms: An interpersonal perspective. In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. (pp. 408-437). New York: Guilford.
- 嶋田美由紀・田中雄三 (2005). 青年期の対人関係が内的作業モデルの変化に及ぼす影響 鳴門生徒指導研究, 15, 16-29.
- Stephenson, W. (1953). *The Study of Behavior*. University of Chicago Press.
- 鈴木潤也 (2010). 自己受容概念の再考——「ありのまま」の自己受容についての検討—— 青山心理学研究, 10, 49-61.
- 高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究 教育心理学研究, 47, 317-327.
- 武内珠美・田井中華恵・河野伸子 (2014). 母親の養育態度に関する研究——母親自身の愛着スタイルと自己受容に焦点を当てて—— 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 36, 43-54.
- 戸田弘二 (1991). Internal Working Models 研究の展望 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 上田琢哉 (1996). 自己受容概念の再検討——自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として—— 心理学研究, 67, 327-332.
- 上田琢哉 (2002). 自己受容と上手なあきらめ 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 (pp. 189-205) ナカニシヤ出版
- 浦川麻緒里 (2014). 自己受容を形成する要因についての検討 (1)——幼少期からの過去の認められ経験と青年期の自己受容との関連から—— 純心人文研究, 20, 25-37.
- Walter, T. (1976). *Love yourself*. Downers Grove: Inter-Varsity Press. (狩栖健太郎 (訳) (1985). 自分自身を愛する すぐ書房)
- Yamada, K., Fujii, T., & Uebuchi, H. (2011). Measuring attachment models using implicit association test. *Abstract Book of Plenary Meeting of the International Society for Research on Emotion*, 238.
- 山田みき・岡本裕子 (2006). 現代青年の自己受容——自己による自己受容と他者を通しての自己受容の観点から—— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 55, 339-348.

# Determinants of self-acceptance from the perspective of attachment theory

Ayuko HOKAO & Tomoko IKEGAMI

This study's aim is to investigate factors that determine levels of self-acceptance from the perspective of attachment theory. We defined authentic self-acceptance as the subjective feelings of self-acceptance experienced when faced with ideal-real self-discrepancy, and examined whether attachment styles that formed with caregivers in early childhood, and internal working models (generalized views of self and others) built on the attachments, play a critical role in self-acceptance. It was hypothesized that secure attachment formed in early childhood may serve as a buffer against threats from the ideal-real self-discrepancy via the present nature of the internal working model at later stage of adolescence. Contrary to our prediction, results showed that participants who had a low (relative to high) level of secure attachment were more likely to accept negative aspects of self in interpersonal relationships, indicating that secure attachment with caregivers in infancy may increase vulnerability to ideal-real self-discrepancy in adolescence. On the other hand, consistent with our notion, it was found that those who have a low (relative to high) level of avoidant attachment managed to accept negative aspects of self. As predicted, participants who had positive views of others tended to exhibit a higher level of self-acceptance. These results suggest that negation of avoidant attachment and negation of negative views of others promote self-acceptance. More importantly, the current results suggest the possibility that secure attachment in infancy may have maladjustive aspects of self-acceptance in adolescence.